

面

118

# 寒 卵

本 多 和 子

初日の出和をたまはりし昭和の子  
凍滝の無言のままに流れ立つ  
一と刻の降る雪と見ゆ賑々し  
熱爛の坐高低きに並々と  
寒卵力行ま白き一と並び  
寒風にビラ貼る人のビラを読む  
種袋うすき袋を振りてみる  
薄氷の解けつつ雲の行方かな  
路地行けば風の容に春近し  
細切れの製図鮮明春ごろも

# やげん堀

田 口 鷹 生

ドコデモドアケマシテ日本丸  
シヤボン玉孤独太陽近付きて  
新緑やたちまち想うかみのけ座  
やげん堀夏へ夏へと傾きぬ  
絶えて久し目礼する牡丹かな  
残り香の金木犀が好きですよ  
霜柱ふんでみようか地底まで  
かりそめの恋に迷つて寒椿  
涙とは光るものなり枯れ尾花  
つれづれに大和魂探すかな

# 東京五季

加 茂 達 彌

元日のかくも重たき新聞紙  
いくたびも影を踏まれて花の客  
残花余花五体どこから芳らむ  
玫瑰やむかしは沈みやすき艦ふね  
日本を半里離りて見る花火  
秋いまだ金管楽器の火照るなれ  
妹よ秋扇は力まず遣ふもの  
肝吸ふや二百十日の晴れわたる  
日溜りや人は尾骨を隠したる  
片仮名で書くフクシマの寒さかな

# 空の音

吉田香津代

国姓爺合戦ややつ玉葱に芽  
街角や春の風邪引く予感あり  
花の雨昼は昼のこころにて  
春の月すり減りへりゆきし木の敷居  
空叩く紙風船に空の音  
陰膳や羽虫がぼつと春障子  
閉じ蓋を開ける日永の右手かな  
薫風や向こう岸へは櫓の舟で  
竹皮を脱ぐ泣く子がふいに静かなり  
太宰忌やビールの泡に泡の音

# 春浅し

北上政枝

白鳥来ふるさとへ耳研ぎすます  
冬 鷗 荒磯の海へ海の音  
おちこちに牡蠣殻の山寒波来る  
明けやらぬ門灯の雪手で払う  
汲み置きの水にさざ波冬紅葉  
短日のしこしこと噛むスルメ烏賊  
鬼やらい雲の厚みのぼつと割れ  
野猪親子水音ざぶざぶ空へぬけ  
羽化おえし心地するかな浅き春  
それとなく物憂い時間冬芽生ゆ

# 桃の実

高 橋 龍

初 蛙 五 体 投 地 を ね む ぐ ろ に

赤茄子の腐れてゐるところより—茂吉に倣ひて

自 転 車 の た ふ れ て ぬ た る と こ ろ 百 合

引 返 す 鷹 も 見 ら れ て 伊 良 湖 崎

産 気 づ く 桃 ち ら ち ら と 山 野 か な

桃 の 実 は 意 識 の 流 れ さ か の ぼ る

干 柿 に 三 カ ラ ッ ト の 種 残 る

雪 尽 き し 圓 つがる な 空 を 目 の 中 に

ニ ー ベ ル ン グ の 指 輪 リング の 寸 法 サイズ 直 す 七 草

楢 ながまる 円 の 中 に 一 書 き 草 生 や す

渡 し 場 に 長 く て 長 い 棹 が あ る